

さきがけ

発行
NPO法人
維新の魁・天誅組
〈連絡先〉〒637-0043
五條市立民俗資料館
奈良県五條市新町3丁目3-1
Tel&Fax 0747-22-0450
Mail info@tenchugumi.jp

「里山を守ろう！」

理事長 柴 田 知 啓

俳人、松尾芭蕉は（元禄二年三月二十七日）に江戸から「奥の細道」の旅に出た。丁度七月の今の時期と同じくらの頃に福島県須賀川の地にたどり着くとへ風流の初めや奥の田植歌」と懐紙にのしるした。

若苗で青く染まった田んぼの風景が思い浮かぶ。農村の里山の美しさである。

アジアの最東端に位置する日本は、温暖湿润な気候に恵まれ、主食の米は欠かせない。更に湿润さを利用して米を発酵させる文化を築き、味噌、醤油、酒、酢などを発見させた。それほど米は貴重なものであるのに、昨今、米は高いとか、安いとか市場を賑わせているが、消費者も生産者も双方納得のいく価格と政治家の力で築いてほしい思いである。でないと米離れは美しい里山を守っていけないのです。



池田謙次郎伝の錯綜

京都女子大学非常勤講師

中 村 武 生

はじめに

半田門吉「大和日記」文久三年（一八六三）八月一八日～一九日条によれば、中山忠光勢の暴発を防ぐため三条実美の使者として平野国臣が和州五条に現れるが、その同行者に池田謙次郎の名がある。平野は復命のため帰京したが、池田らは残った。同日記九月九日条によると、下市村の井伊家陣所襲撃にも池田は参加している。が、その後消息を絶つ。

現在、東吉野村谷尻に「天誅組義士池田謙治郎戦死の地」碑が存在し、同村木津の宝蔵寺には同村天誅組顕彰会によつて墓碑も建立されている。後者の裏面には同月二五日に戦死したとある。

が、それとは別に、慶応四年（一八六八）閏四月二二日、戊辰戦争中の奥羽地方で殺された長州毛利家の中村小次郎が、池田のその後だとされる（一）。いずれが事実であろうか。この錯綜を解きほぐすのが本稿の目

的である。

一 和州脱出は確実

天誅組破陣後、忠光を守るなどして防長へ逃れた六名が、元治元年（一八六四）三月、毛利家政府に対して上書を記している（二）。前年の八月十八日政変によつて中央政局から排除された毛利慶親父子や三条実美ら七卿の名誉回復のため、親長州浪士たちはさまざまな努力をしていた。この上書もその一環で、成算はともかく忠光とともに京都へ潜入し政敵に一矢報いたいと請願した。

六名とは小川佐吉・半田門吉・伊吹周吉・上田宗児・島浪間、そして池田である。この時期、池田が忠光の元側近たちのそばにいたことは疑えない。前年九月、池田は和州で死んではいない。

二 実母のぶの伺書

つづいて中村小次郎と池田が同一

人物かを検討する。それを確定できる史料を得た。経緯を略述する。一八七六年（明治九）七月、内務省から滋賀県に対して、同県出身の殉難者である豊田謙次の事蹟の照会があった。が、名前の類似からか誤解され、池田こと中村が調査対象とされた。同県は池田の出生地や住所などを明らかにできず、一旦その旨を返答した。が、翌年二月、どうい経緯が当時京都市内に住んでいた池田の実母のぶに伝わり、申し出があったと京都府から報知された。

重要なので、のぶの伺書を全文載せる（3）（割注部分は（ ）で示した。読点は中村）。

戦死之義二付御伺書

上京第廿九区杉屋町住居

池田のぶ長男

戦死者

池田謙次郎

或ハ中村小四郎ト云
右謙次郎義ハ私実倅ニテ同人十四歳ヨリ京都御幸町通三条上ル町儒家藤本鉄石ノ門ニ入レ勤学為致候処右鉄石師モ慷慨家ニ付同シク謙次郎義モ為国事東西奔走終ニ文久三癸亥八月朔日（謙次郎年廿四歳ナリ）私宅（此節ハ滋賀県下大津寺町ニ住居セ

リ）罷出候ニ付心当リノ方相尋候処行衛不相方折柄藤本鉄石モ大和ニ於テ戦争有之趣承リ候ニ付定メテ其方江罷越居候義ト存シ、且ハ別テ其節ノ御時節柄ニ付同人行衛強テ尋出シ不申罷在候処私義追々不仕合ニ付其後大津大工町ニ住居（寺町ヨリ転宅ス）罷在候節、則明治元年戊辰二月十四日ニ久々ニテ右謙次郎私ヲ訪ネ来リ私宅江罷越候ニ付先年来ノ義ヲ承リ候処其荒増ニハ大和戦争後長防ノ両国間に潜居シ報国ノ一端ヲ尽シ居候処嬉シクモ今般御一新ニ被為成素志ヲ遂ケ候段申居リ、然ルニ此上朝敵追討トシテ華族醍醐殿奥羽地江御出発ニ付同君江随従ヒ戦争ニ赴クニ付テハ万一存命ナレハ同年（明治元年ナリ）冬ニ帰宅ハスレトモ戦死ナレハ得歸リ不申、依テ今日ハ暇乞ニ罷来リ、尤是迄ハ池田謙次郎ト相名乗リ候得共今般ヨリ中村小四郎ト改名シテ奥羽江出張致ス旨申述ベ直チニ出立仕候、其已来同年冬ニ至リ為何音信モ無之ニ付前日ノ言葉ノ如ク帰宅不為ニ於テハ戦死力又ハ病死等モ候ヤラント私一人ニテ痛心罷在候、其後明治貳年ヨリ京都江引越シ罷在候、然ル処先般来於滋賀県右池田謙次郎事中村小四郎ナル者明治元

年奥羽戦争ノ御戦死ノ者ニ付該県ニ於テ御取調被為在候得共不相分旨ニ附再度近來御取調有之義ヲ伝承仕候ニ付同人義戦死ニ候ハ、全ク報国ノ一端ヲ表シ旧来ノ素志ヲ遂ケ候ニ付追悼吊祭等致シ遣ハシ度候間右中村小四郎ハ弥奥羽地方ニ於テ戦死仕候哉承知仕度、依テ此段奉伺候、已上
上京第廿九区杉屋町
明治十年二月十五日
池田乃婦（印）
右之通申出候、依テ奥印仕候、以上
戸長 田中彦兵衛（印）
京都府知事榎村正直殿

近親者が維新後一〇年たらずで作成したものゆえ、信に足ると判断する。以下、明らかになった点を列記する。

一 池田は一四歳で下京の御幸町通三条上ルの藤本鉄石に入門した。
二 文久三年（一八六三）八月一日、江州大津町寺町の自宅を出奔した。のぶは心当りを尋ねたが行方知れず、藤本が和州で戦争を起こしたと知ったので倅も参加したと見込んだ。時勢柄、強いて探さなかった。このとき二四歳とあるので、逆算すると天保十一年（一八四〇）生まれ

と判断できる。

三 その後、のぶに不幸がつづき、寺町から大工町に転居した。

四 慶応四年（一八六八）二月四日、突然池田が転居先を訪ねてきた。そこで出奔以来のあらましを聞かされた。それが以下である。

五 天誅組破陣後、防長に潜伏し国事に尽力した、うれしいことに維新となり素志を遂げた、これから「朝敵」追討のため醍醐殿（忠敬）に随従して奥羽へ向かう、戦死するかもしれないので暇乞いに来た、存命ならば今年の冬に帰宅する、今後は中村小四郎と改名すると述べてすぐ立ち去った。

六 その後、同冬になってもなんらの音信も無かった。戦死、あるいは病死などしたかとのぶは一人で心を痛めていた。翌年、現京都市中区堺町通二条下ル杉屋町に転居した。

七 滋賀県による池田こと中村の事蹟の再調査中、のぶに伝わった（ここで倅の戦死情報を得た）。戦死が事実なら、間違いなく国恩に報いる一部になった、素志を遂げたことになる、追悼し弔ってやりたい、倅はたしかに奥羽で戦死したのを知りたいとして伺書を記した。

むすび

小稿は、錯誤の多い池田謙次郎の履歴について事実確定をめざしたものである。本文でふれられなかったが、生年や出身地も混乱していた。弘化元年（一八四四）・江州膳所とするものがあるが（4）、天保十一年（一八四〇）・同大津と提示できた。深めたい点は多くあるが、紙数の都合で別の機会に譲る。

注

- 1 高野孤鹿『福島に於ける天誅組浪士の最期』（真相報知社、一九三一年、九頁）
- 2 下関市立歴史博物館蔵。二〇二一年一月、複写にあたり学芸員

「さきがけウオーキングに参加して」

令和七年四月二十九日、維新発祥の地 天誅組の史跡を巡る「2025 さきがけウオーキング」に参加した。

はじめに特定非営利活動法人維新の魁・天誅組の柴田理事長の挨拶があり、続いて五條市観光ボランティアガイドの会会長の内倉保氏から

山田喜弘

「天誅組とは『尊皇攘夷』を唱へ、倒幕の義挙を行った人々である。」との紹介が為された。

今回は五條市役所に集合してその周辺のゆかりの地を巡った。ボランティアガイドとしてA班 内倉保氏、岡田美枝子氏、B班 曾雌守一氏、上野英一氏、芳田耕平氏、そして、

稲益あゆみ氏の高配を得た

3 以上は京都府庁永年文書（「諸官往復」簿冊番号明11-11、京都府立京都学・歴史館蔵）による。虫損部分は国立公文書館デジタルアーカイブ「贈位内申書」（請求番号贈位00205100）の同文書で補填した。後者は浦出卓郎氏の教示を得た

4 田村哲夫編『防長維新関係者要覧』（マツノ書店、一九九五年、七五頁）。なお北畠治房の手記「北畠四位奉答台命書」にも「大津人」とある（日本史籍協会編『野史台維新史料叢書』三四、東京大学出版会、一九七四年覆刻、六二頁、六九頁）



出発の様子（五條市役所）

五條市立民俗資料館の岡喜美枝氏が同行された。行程は次の通り。

市役所↓乾十郎墓↓極楽寺↓五條代官所跡（前市役所）↓井澤宜庵宅跡↓民俗資料館（長屋門）↓五新鉄道跡↓五條新町（まちなみ伝承館）↓川開きフェスタ会場

□何故、五條代官所なのか

私はこれまで天誅組がどうして五條代官所を襲撃したのだらうとばかり考へてゐた。また天誅組の人達は地元の人では無く、大方、他の地域からやつて来た人達なのだらうと思つてゐた。



井澤宜庵墓所

ところが、内倉氏によると中山忠光（公卿）、吉村虎太郎（土佐藩）、松本圭堂（刈谷藩）、藤本鉄石（岡山藩）等、確かに主だった人達は土佐藩等、他藩の人達が多いのだが天誅組に岡八幡で加はった隊士、乾十郎、井澤宜庵等は五條の人だと言ふ。そして、当時の五條代官所は米だけで七万石の石高を誇る幕府の直轄地でこの辺で五條に匹敵するのは大坂の代官所くらいであつたとのこと。幕末当時、五條は伊勢、紀州、高野街道等、五つの街道が交差し、物流の集散地で、人の交流も多く、交通の要衝だつたらしい。

またこの日は訪れなかったが近くに住んでゐた森田節斎は吉田松陰も教へを乞ひに来たといふ学者で乾十郎、井澤宜庵とともに節斎のもとで学んだと言ふ。

五條代官所で、職務に就いてゐる者は少数で、しかも襲撃の当日は宴会を開いてゐることを乾十郎、井澤宜庵を通じて天誅組は予め知つてゐた。つまり地元の有志がもたらした内部情報をもとに計画を立てたから